

フォトスカベンジャーハント！ 英語圏以外でこそ共通言語使用場面の設定を

—— ジャカルタ日本人学校における現地校交流での試み ——

前ジャカルタ日本人学校中学部 教諭

北海道帯広市立緑園中学校 教諭 古村 俊大

キーワード：フォトスカベンジャーハント，現地校交流，第二言語としての英語，英語圏以外の国，国際人育成

1. はじめに

三年間の在外教育施設勤務の中で「国際（現地）理解」として、現地校との交流事業を数多く経験した。

小学部児童の交流では言葉を介さない交流（一緒に遊ぶ）も成立するが、中学部の生徒間交流では、「ある程度の語学力」と「自ら積極的に関わろうとする姿勢」はどうしても欠かせない。

しかし、生徒らは現地語（インドネシア語）が上手にできないことや、思考することと言葉がかみ合わないことを理由に躊躇し、話すこと自体を諦めてしまう場面に数多く出合った。さまざまなコミュニケーション手段を駆使してでも「一緒に遊びたい、関わりたい」といった感情や姿勢は小学生よりも大きく劣り、自我、気恥ずかしさが邪魔をしてか気後れしてしまうのである。

その国への尊敬の念を込め、その国の言語を使って交流するといういかにも日本人的な礼を尽くしたアプローチで、段階的に交流内容を高度に、関係を密にしていこうとするこちらの意向は大きく崩れ、事業進展の妨げだった。

日本とインドネシア両国互いの第二言語は、「英語」である。それを使って「互いが歩み寄る」という、今までの発想を転換して取り組んだ現地校交流事業の試行をここでは紹介したい。

2. 現地校交流の実際

(1) 長い歴史

近隣校との交流を長い期間にわたって続けており、在籍が長い児童生徒同士はお互いに顔を知っている間柄に発展している点は功績である。

ただ、教員が短期間で入れ替わる在外教育施設の実態上、過去の資料は残っているものの、交流内容が重複することも多いのが実態だった。

(2) 小学部交流の内容

「スポーツ交流」、「音楽交流（楽器）」、「ダンス交流（伝統舞踊）」、「文化交流（伝承遊び）（習字）（折り紙）」を教えるといったものが繰り返されていた。

お互いの学校行事などカレンダーをすり合せながら、制約のある時間の中で行うには、準備期間が少なくても、成立しやすいものが好まれているといえる。

(3) 中学部交流の内容

小学部で行う数時間～半日の交流に対し、中学部では「日伊友好親善スクール」という名称の休日1日を使い、小グループを形成し、関係を密にするようなプログラムを工夫していた。かつては宿泊を伴う事業だったが、近年の見直しにより1日日程に縮小された。

3. 語学学習の実際

(1) 現地語（インドネシア語）学習

小学校1年生から中学3年生までインドネシア語学習に取り組み、現地校児童生徒との交流が円滑に進むよう、交流に必要な言葉または挨拶といった、交流や生活上最低限必要なものを学んでいる。

ただ、中学部では週1回総合的な学習の時間で年間17～35時間程度を目標に現地教員の指導を受けているが個人能力差が大きい。これは保護者のどちらかがインドネシア人であるといった生活言語自体がインドネシア語である子も少なくないため、中学部ではレベルを細分化し行われているもののなかなか進展しない状況にある。

(2) 保護者の要望

「英語力」向上という保護者の願いは根強い。これは英語圏ではないインドネシアにおいても、ビジネスシーンでは当然のように英語が世界共通言語として使われ、今後のグローバル化に伴い生徒にとってはさらに必要という認識からである。対してわれわれは英語指導に取り組みながらもそういった認識が希薄であり、インドネシアは「英語環境にない」ということで、「英語を使う場面」の設定を行っていない実情があった。

(3) 英語検定取得への高い意識

中学部全体での英語検定取得への意識は高い。基礎的学力も高く、進学する学部・高校によっては取得の結果により有利になることから中学部卒業までに二級取得を目標にしている生徒も多い。実際に二級、準二級取得者は学年の四割程度。小学部からの受験者数も多く、保護者の関心も高い。

(4) インター校比率

在留邦人児童生徒のインター校比率は、10：1程度と少数。多くの児童生徒が日本人学校へ通学をしている状況。これは学校行事をはじめとした特色ある教育活動を展開していることや施設、環境、教育費、安全面といった好条件で在留邦人からも高い支持を得ている結果だが、将来を見据え、悩みながらも英語習得を理由に転学する児童生徒もいる。

(5) 現地校生徒の語学力

広大な面積を持ち、多民族の集合体といえるインドネシアは、それぞれの民族の言語から共通言語インドネシア語に統一した歴史もあることから、国民の語学習得への関心も高く、第三言語を習得する能力も高いといわれている。

大学への進学のためには英語活用が必須であるため、ある程度の生活水準を超えた人々の多くは英語を習得しており、語学習得はビジネスに直結することを知っている。そういったことから現地私立校への進学を希望する保護者の英語学習への関心は高い。

ただ実際は、流暢に会話ができる生徒もいる一方で、小学部を卒業してから学習を始めた日本人学校中学生同等レベルの生徒もいて、日本人学校だからと引け目を感じる必要はない。

4. 英語を活用した交流事業

(1) フォトスカベンジャーハント

スカベンジャーとは「ゴミ拾い（ガラクタ集め）をする人」を意味する。アメリカなどではポピュラーなゲームでオリエンテーリングに近い。初めて会う人々や初めてその場所に来た時になど、非常に有効な手段と言われている。

大学に入学したような場面では、その土地のもっとも有名な観光スポッ



トに導くような仕掛けがされる。例えば、大きな彫刻が有名な場所では、それを連想させるようなキーワードを並べ（シルエットのみの写真、観光案内所のパンフレットの表紙にある。街中を走る○番のバスの車体に。誰もが知っている。といったヒント）そこに導き、『その彫刻と同じポーズで写真を撮れ』といった指令が待っている。



(2) 計画概要

4回の交流で計画した。1回目は校舎内を使って「AからZまでの英単語」を探し写真1枚に収めるというもの。ここではアイスブレイクやグループ内の人間関係構築の意味もあるので、必ず写真には撮影者以外の班員は並んで写真に収まるよう条件をつけた。2回目は近隣の量販店を会場に「英単語しりとり」を行なった。さらに一体感を得るようなミッション「指令」を与えた。例えば、「同じベンチに腰掛けて」、「全員で同じ帽子をかぶって」、「全員で同じ赤いものを持って」、「一番高価な物を探して」、「Rp150,000の値札と一緒に」といったもの。3回目は、プレゼンテーションを班別に行う準備としてPC Roomで編集作業と発表原稿づくりを。4回目は体育館に6箇所のブースを設定し、発表を行った。



5. 積極的な姿勢を生むために

(1) 方策（工夫）

① デジタル機器利用

両校生徒共にデジタル機器・コンピュータ活用に長けており、デジタルデータ化により情報交換も容易に行うことができた。さらに作業を分担するなど生徒同士でEメールでの情報交換を盛んに行うなど、想定を超え、「その場限りの交流」から前進した姿を見た。

② 修学旅行でのフォトコンテスト実施

「写真を活用した活動」の前段階として、旅行期間中にコンテストを実施した。朝にその日の「指令」を受け取り撮影に臨むというもの。（例「観光客と一枚」「〇〇寺院を背景に」「〇〇土産を探せ」等）

③ 量販店の広さ

広い店内を走り回りながら時間内に目的の物を探す。という今回の活動は、動きがあったことで活気を生むことができた。

(2) 効果（副産物）

① 使用言語の広がり

基本的に英語を使用させたが、交流が進む中でインドネシア語が堪能でない生徒も英語とインドネシア語を織り交ぜながら交流を進めるようになった。（どんな言語を使用しても）コミュニケーションをとろうとする姿勢が見られた。

6. 学部経営の視点から（普通の学校生活からの仕掛け）

① 母語での言語活動の重要性

中学部では語学にとらわれることなく「自分の意見を堂々と主張できる生徒の育成」を目指した。そのためにもまず母語で「自分の意見をまとめる」「発表する」といった機会を設定し、言語活動充実の仕掛けをいくつか行った。

② プレゼンテーション機会の設定

3年間の見通しの中で、1年生ではキャリア教育・宿泊学習の中で自分の意見を新聞媒体にまとめる。2年生では修学旅行や職場体験学習の中でパワーポイントや紙芝居を制作、発表させ、3年生では今後のインドネシアと日本の友好関係のための提言を日本領事館で行うといったものを企画。トライ&エラーを繰り返すことで、発表者として育っていく。

③ 生徒会活動、学年集会の活用

公式な場での発言機会を設けるために、生徒会活動を充実させた。話し合い活動の中で発表に向けた思考も育つ。また週一回の学年集会を開催し運営を行う。意見発表・スピーチの時間を設け、全員の前で自分の意見を述べる機会を増やした。特に2学年以降では英語でのスピーチという条件を付け実施した。

④ 字数制限のあるなかで意見をまとめる

学級日誌に100文字で報告するという欄を設け、字数の決まった中で自分の考えをまとめる。また定期テストでも文章表記で自分の意見をまとめる設問の設定をお願いし、教科担任全員で取り組んだ。

7. 最後に

在外教育施設の特徴はそこに交流できる環境があることである。だからこそわれわれは丁寧に、周到的な準備をしながら、ねらいをもって取り組みたい。

さらに、英語圏以外の国であるアジアの国々にあっても、相手国の言語に敬意を払いながら「第二言語」「共通言語（英語）」でのコミュニケーションを積極的に取り、肩を並べ同等に交流すべきである。

今後の日本人がアジア圏での存在感を示し、さらには世界で活躍できる人材となっていくためには英語における交流機会や使用場面の設定をしていくべきである。

最後に、今後も日本人学校において、派遣される教員諸子の創意と熱意により、ますます充実した教育活動が展開されることを願っている。